

山路愛山研究Ⅱ

定 平 元 四 良

5

『独立評論』の創刊にあたって、「腕力的基督教」の信奉者となり、適者生存の立場から帝国主義論を主張した愛山は、日露戦争中『社会主义評論』(38年2月)、『我々の祖先の社会政策』(38年5月)を、戦後『国家社会主義梗概』(38年12月)、『国家社会主義と社会主义』(39年4月)を再刊『独立評論』に掲載し国家社会主義を主張するようになった。まずこれらの内容を簡単に述べよう。

『社会主义評論』は世間一般に抱いている社会主义への恐怖に対して、社会主义は旧きものであって、堯舜の道も社会主义と云って差つかえなく恐れるにおよばないことを述べ、社会主义は現代を批評しており、その批評も合点のいくことだと指摘している。彼が指摘する社会主义の現代批判とは、今の私有財産、自由競争を不变のものとして考えている人もいるが、これらの所有形態は歴史的に発展してきたものであり、社会主义がこの今の形態を変更しようとしているのは間違ったことではない。今は自由競争の弊害が顕著になってきている。貧富の差が増大してきて人心の堕落がみられる。「世の中は斯云ふ風に昔しの金科玉条であった自由競争は有名無実のものとなったと致しましたならば、此悪い世界を立直すにはどう云ふ仕掛けにしたらば善いのでしょうか」³⁸⁾ この仕掛けを考えるのが社会主义である。そして、サン・シモン、ロバート・オーエン、チャールス・フーリエル、ルイ・ブラン、カール・マルクス、フレデリッキ・エンゲルス、ラザール等の主張を説明している。そして愛山は「我輩は正直に申します。此説の大部分は真理として受取ることが出来

ます。殊に社会主义者が今の個人主義の資本制度を批評した其議論に千斤の重みがあると思うのであります。我輩は愛国者の側から考えても今の個人主義の資本制度は随分危険なものであろふと考へます」³⁹⁾ といっている。最後に警視庁が平民社を取締ることによって、今まで無自覚だった人々が社会主义に注目するようになったことを喜んでいるが、平民社の非戦論には賛成できないことを述べている。

『我々の祖先の社会政策』 この論文もまた社会主義が恐ろしいものではないことを、日本の昔に行われた社会政策の大略を記すことによって説明しようとしている。その基本にあるのは「國家」の概念である。それは後に彼が国家社会主義論を展開する基礎をなすものでもあった。日本は『古事記』『日本書紀』の時代から、国は一個の大きな家庭であるというのが根本的信仰であった。家庭の間には相感同情というものがある。国家の各要素間に相互の愛情というものがある。天皇の詔勅は唯皇室の人民への御憫を表わすだけではなく、人民相互の社会的愛情を表わすものである。人民相互に一家庭中の兄弟姉妹であるという感情を以て愛すべきである。国家は一家庭なりという前提から考えれば、土地・資本の国有共有はすこしも不都合ではないということになる。天皇の詔勅は、単なる思想の表現でおわったではなくその主義を実現したのである。人民の解放は西洋の歴史の特産物ではない。日本でも、酋長の私有物として圧制の苦役に呻吟していた人民を皇室は解放されたのである。土地の国有ということは口分田の制度に最もよく示されている。資本の共有も原則的には国家の都合しだいで、人民の労力も産物も自由に取扱った。国家が一家であ

38) 『山路愛山集』明治文学全集35 筑摩書房 91頁。

39) 同 上 95頁。

り、人民が兄弟である以上は資本も共有でなければならないのが論理的帰結である。以上のように日本の昔に於ても、形こそ異なっているが原則と主義とは大差のない思想が行われていたのであって、社会主義は珍らしくも恐ろしいものではないことを述べている。

『国家社会主義梗概』 これは19項目にわたって述べている。愛山の国家社会主義論を知るためにいさかかながすぎるくらいはあるが、各項目毎に説明しよう。

1. 国体 日本国の総体は一家族なり。家人父子の関係を以って国体の本義となす。旧い天皇の詔勅を引用して、皇室既に人民の父母ならば国民の一家たること 論理的必然の結果であるとする。

2. 人民 国家既に一家にして皇室既に民の父母ならば君民は喜憂哀楽を共にしなければならない。

3. 共同生活の大主義 以上の理由から共同生活は日本王道の根本義である。元来国家は共同生活を目的として起ったものである。国家の侵略的行動も要するに共同生活の為めである。一つの階級（貴族）が他の階級（平民）を圧抑している国は有機的な一国とは見做し難い。国家は二つの意義において共同生活体である。即ち一つは経済的見地からみると、樹液の全樹を循環する如く一国の富の人民各個を潤す為めに有機的に活動するものである。他の一つは、防衛的には他国の掠奪より人民の生命財産を保護するものである。いずれの点よりみても国家の目的は共同生活である。

4. 絶対的の権利と便宜的の権利 国家の目的は共同生活に在る。共同生活の目的を達せんが為めに国家の活動する時はその権威は絶対である。国家は国防の為には人の生命をも要求し得る。個人の土地所有権などは便宜的権利にすぎない。

5. 国家の能動と個人の能動 国家の権利を絶対的なものとすると個人は自尊自重の念を失うという意見があるが、國家の絶対的なのは法律の問題であり、政策的には国家は個人の活動を充分尊重するものである。

6. 選良論 賢者位に在り、能者職に在り、是れ理想の政府なり。そのために如何にして人才を

得るか。現在の日本における官吏登庸試験の方法を是正すべきことを主張する。その理由は、高等教育の機会が平民階級を離れ紳士階級に限定される傾向にある。紳士級の子弟が官職を壟斷するに至る。これを是正する普通選制度に詳細な規定を作っている。

7. 物質的満足 人才をして所を得しめたつぎに重要な問題は、人民に物質的満足を与えることである。ここにおいて社会政策が必要となる。

8. 昔の社会政策と今の社会政策 略

9. 関税政策 社会主義者は万国の平民級は相合して万国の紳士級と格闘すべしというが、現在は国家と国家、民族と民族との闘争が激甚である。国際間に於ける武力による圧制は問題外としても、自国の生産界を各国の資本家より守護するためには関税政策をとらねばならぬ。

10. 領土聯合 共同生活の原則は国家が或る大きさの領域を有するにあらざれば、国防の見地からも、他国の経済的圧制から免れん為にも、他国の大富豪と戦う為にも領土の拡張が必要である。

11. 人口論 略

12. 富豪の兼併を抑ふべし 貧富の差が大きくなると国家の命脈を傷けることになる。大富豪は国家を自家薬籠中のものとする危険がある。平民階級はそれを黙視することはできない。国家は勢い富豪を駕御する道を講ぜざるを得ない。

13. 共同組合・労働組合 大資本の圧制に対抗するために小資本家は合して共同組合を作り、労働者は労働組合を組織した。何れの時代においても国家は少数の強者に対して多数の弱者を保護するのを常とする。今や上に政府あり、中間に富豪社会あり、下に労働社会あり。政府たるもの労働社会と相呼応して富豪社会の勢力濫用を矯正しなければならない。国家が富豪社会の機關となって労働社会を圧倒し去るとは信じられない。

14.—19. 略

この『国家社会主義梗概』に対して堺利彦は以下のように批判した⁴⁰⁾。第一に、「国家」の概念が不明瞭である。あるときには、「国家」とは「日本国民の総体」を意味し、またあるときには、「政府」を「天皇」を意味しているようである。変通の妙想うべし。第二に、国家社会党は普通選

拳運動の中心たるべしと聞いているが、その頭領山路愛山は普通選挙が愚民政治になることを恐れて階級的選挙（教育程度と所得程度による比例代表制を指す。第6の選良論で述べている。）を主張している。要するに愛山は人才主義、階級主義、貴族主義である。ただ貴族階級中、少数の大富豪に国家の権力を手中にされるのを防ぐため止むを得ず多数平民の力を借りて大富豪を抑えんとしたのみである。その立場は小貴族階級であり中等階級である。官吏中に中等階級中の苦学者（若しくは独学者）を入れよというのみで、官学者に対する私学者の要求にすぎない。第三に平民の団結を説かず、平民の団結の必要を自覚せしめずしてただ政府に之を保護せよと勧めている。富豪の権力を代表する政府に対し富豪を駕御せよと云うのは無理な註文である。要するに愛山は中等階級主義であり小資本家党である。と批判して、最後には、社会主义の名はただ人目を引かんための看板にすぎない。愛山の運動は無益な徒労に終るであろう。過渡的時代の一時的現象として、やがて空中分解するであろうといっている。

『国家社会主義と社会主义』 これは板垣退助の「国家社会主義」批判に対して答えるかたちで書かれたものである。その内容は

1. 社会主義と国家社会主義 略
2. 社会主義は一定の名に非ず一(1) 略
3. 社会主義は一定の名に非ず一(2) 略
4. 社会主義は翻訳的、国家社会主義は獨創的
マルクス一派の社会主义は直接あるいは間接にドイツより輸入したもので、その思想は翻訳的である。国家社会党の社会主义は日本歴史の研究から生じたもので独立の思想である。日本の社会党が各国思想の翻訳で世に出たのは、何事も外国のものを珍重するのが当節の習であるから青年達には魅力がある。さりながら、国家社会主義者が自己の歴史による立論は、社会主义は皇道に反し、我が国体に反するなどという没分曉漢を曉諭するためによかったと考える。
5. 国家社会主義の歴史的見解、三元論 国家社会主義者は日本の歴史を如何にみるか。日本歴史は国家（主権者及び其代表者たる国家機関の全体を指す）と豪族と人民との三階級が国の内外の情況により或は争闘し、調和しながら共同生活の

理想を実現せんとする行動の連続にはかならない。ということを日本歴史により説明していく。そして何れの時代でも国家、豪族、平民の三階級がある。それらが相互に他者の暴虐を抑えながら、共同生活の理想を実現せんと努力してきた迹が日本歴史である。というのが国家社会党の日本歴史観である。

6. 国家社会主義は国家に執着す。 共同生活の最初の動機は外敵に対する共同防衛に外ならず。その結果社会の統一を来たし、この社会の有機的組織則ち国家の機能を生じ、この国家のために一身を献げる公徳を生じ、時期の進むと共に、最初に共同防衛の機關であった国家が共同生活の機關となつたのである。社会主义の一派の中には、今の国家は紳士閥の国家で平民の国家ではないから之を破壊し其の能力を弱めようとする者もいるが、國家なき人民の不幸は猶太人をみれば明かであるし、国家の微弱なる人民の不幸は支那人の生活がこれを証している。今の国家を弱め、あるいは破壊することは所詮人民の利益となることではなくかえって不幸を増すことである。国家社会主義者が国家の堅固なることを希望し其能力の確実なることを希う所以である。

7. 社会主義は二元論、国家社会主義は三元論

社会主义と国家社会主義とは共同生活を目的とする点に於ては一致するけれども、社会主义は二元論（紳士閥と平民級）を以て社会の事相を論ぜんとする。国家社会主義者は国家は必ずしも紳士閥の奴隸に非ずと信ずるが故に三元論（国家、紳士閥、平民級）を以て社会の事相を論ぜんとするものである。

8. 社会主義と国家社会主義の一致する点—共同生活 社会主義者は土地資本を共用し共産的の国を建てるなどを理想とする。則ち土地も資本も必竟共同生活の為めに使用すべきものなりということを主義とする。此点に於て国家社会主義者はもとより異論はない。国家社会主義者の見解よりいえば土地も資本も元來国家のもので個人のものではない。共同生活を旨く実現するために、便宜的に国家が権利を人民に与えたにすぎない。理論的には社会主义者よりも国家社会主義者が急激である。ただ、社会主義者は共産制にあらずば共同生活の実現ができないと考え、国家社会主義者

は共産制に固守しないだけである。

9. 社会主義者と国家社会主義者の一致する点一現代の批評 国家社会主義者はマルクスの応声虫たるを甘んずるものでないが、マルクスをはじめ所謂科学的社会主义者の研究成果には多大の同感を表すものである。今の世の中は自由競争の余地は少なく富豪の圧制は人をして憤懣に堪えざらしむるものがある。此儘に放置しておけば世の中は貧富の二階級に分れ無数の悲惨を生ずる。此の点の認識は国家社会主義も社会主义と同様である。

10. 共同組合・労働組合 資本の集中は規律ある組織体としての労働者をも養成した。それによって平民級は富豪に対戦して自己の生活を擁護した。マルクス派は今の国家を以って富豪の国家なりとするが故に此の如き国家に依頼して労働者の組合を保護助長せしむることを欲しないが、国家社会主義者は此の如き組合の発生を促し、其の健全な発達を助成することを国家の当然の任務とする。三元論者たる国家社会主義の見地から云えば、平民級が自治自衛の規律あり組織ある一体となることは、彼等をして国家の後援たらしむるに欠くべからざる条件というべきものであるから、国家はなるべく斯る組織の生長を助成するのである。

11. 国家社会主義は科学的社会主义なり マルクス一派の人々がサン・シモン、フーリエル等の如き空想的、「ユートピアン」的社会主义を離れ、堅実なる歴史上の事実より帰納し、精密なる経済学の穿さくより結論して、科学的社会主义を唱道することは国家社会党も同意する。ただ、国家社会主義者はマルクスの精神を継承した科学的社会主义者である。東洋の歴史を研究し、自国の歴史を研究し、マルクスの二元論は歴史を説明するに足らずとして此に三元論の寧ろ合理的なることを発見したのである。加之国家社会主義者は自国の歴史に於て既に社会政策の実行せられしものあるのを知り、社会主义の根本思想たる原理は日本国民の心裏に於ても早く既に名を異にして実を同じくする思想の存在したことを学んだ。されば国家社会党はマルクス派の研究結果を採用するだけ

でなく、日漢の歴史に於ける共同生活の情態をも穿義し、ここに独立自由の見解を基礎とする日本流の社会主义を建設せんとするものである。

12. 国家社会主義は講壇社会党にあらず 国家社会党は独逸の講壇社会党即ち彼國の国家社会主義者に類似しているけれども同一ではない。彼等よりは我等の方が一步進んでいる。彼等は一方に於ては個人的財産及び権利の現組織の変更を好まない。他方自由放任主義に反し国家により社会の改革を遂げんとする。我等は直ちに國家の渦源に溯り、土地資本は元来国家の所有で共同生活の為めに使用すべきもので、私有権の設立は共同生活の理想を実現する便宜のためのものでしかない。これは個人主義、自由主義に正面から挑戦するものである。

13. 実行的乎、哲学的乎 社会の改革は政治の改革に付はなければならぬことは承知している。しかし、社会問題は直ちに政治問題ではない。まして哲学的問題ではない。終年喧騒して富豪を罵詈するも労働者の一人に牛乳の一杯すら多く飲ますことのできない教理の説法者は寧ろ黙して十人の購買組合を作るものに如かざるを知る。此点に於て国家社会主義者は極めて静かにして、而も質実なる態度を取ることを欲するものである。

以上四つの論文に、愛山の社会主义観および国家社会主義論をみることができる。その特質は、家族国家觀にもとづく、三階級論と階級闘争否定と共同体思想である。資本主義体制が生みだす社会的諸問題を認識し、現代社会を批判するマルクス主義を大体において承認しながらも、国家は超階級的なものであり、人民と相呼応して資本家階級の専横を抑圧し得る主体であるとする国家觀は、ついに、マルクス主義を全面的に受容するにいたらしめなかった。愛山は、目前にみる諸悪の解決の方途を、古き中国や日本の歴史の中に求めていった。それは「古は猷今の如く、今は猷古の如く、人生は同じ法則に因りて動き、国は同じ運命を循環して盛衰する者なり」⁴¹⁾ という歴史觀、また、「彼の書ける世界は修羅闘場なり。戦争、勝利、敗北、征伐、休戦、再戦の連続なり。君よ、僕は此の如き人生觀に対して本能的反感を有

41)『愛山文集』 332頁。

42)『山路愛山集』 363頁。

す」⁴³⁾ という彼の体質とを併せ考える時、愛山の辿る当然の道程であったろう。

愛山には、かれの理論が全面的に主張されて下らん本⁴³⁾ と評価されている上記の諸論文のほかに、石川旭山の『日本社会主義史』とならんで、明治社会主義史の双壁と推奨されている『現時の社会問題及び社会主義者』がある。この論文は、檜井藤吉の「東洋社会党」から説きおこし、「日本社会党」結社禁止後の社会主義諸分派の形成状況に至るまでを各社会主義者を論評しつつ叙述している。同時代史であるだけに、史実についても正確であり、鋭い批評にもそこはかとなく愛情を感じられる。「各相分れて互に其機関雑誌に拠り、交も悪声を放つを見る。我等之を見て何となく物の哀れを感じざるを得ず。手を翻せば雨となり、手を覆へば雲となる。紛々たる軽薄何ぞ論ずるを待たん。人間の離合情あり涙あり。我等は諸君の日に分れ行くの勢あるを見るに堪へざるなり」⁴⁴⁾ と、当時の社会主義者たちの離合集散の有様を慨嘆しつつ叙述している。そして、「徒らに談理の甘味に酔はずして先づ實際上の効果を論じ、社会の最も痛苦とす所より除に其医療の手を下さんことを希望せざるを得ず。多く約して何をも与へず、談理盛んにして实行乏しかば、天下始めは其説を珍とし、後は其説に厭くべきのみ」⁴⁵⁾ とい

う批評は、まことに当時の社会主義運動の弱点をついたものといえる。

愛山は、明治38年8月、斯波貞吉、中村太八郎、山口彈正、山根吾一等と「国家社会党」を組織した。ここに揚げられた十項目の主張は、愛山の社会主義諸論文に述べられている思想を箇条書にしたようなものである。第一項目の「吾人は大日本の國体は、家人父子の情を以て、君民団結し、國家の権力に依りて、共同生活の大義を遂行すべきものなることを主張す」は愛山の国家社会主義思想そのものである。その他の項目(二・十を除く)はみな「吾人は国家は——中略——義務あることを主張す」あるいは「吾人は国家は——中略——ものなることを主張す」というように、國家の主体性の下に社会政策の抽象的要求を羅列している。『直言』(8月25日)は、これら十項目を逐一批判しながら、国家社会党は、根本的には、社会主義に立脚せず、資本主義体制下に社会政策を実施しようとしたにすぎないと批判している。この「国家社会党」は、社会主義運動になんら貢献するところなく自然消滅した。ただ、「東京市電運賃値上反対市民大会」に社会党とともに参加したことが社会主義運動史上に著される唯一の実践的行動のようである。この時に示された愛山の言動は⁴⁶⁾、しょせん、かれが書斎人であることを示し

43) 『明治社会主義史論』青木文庫 161頁。

44) 同 上 125頁。

45) 同 上 127頁。

46) 『荆逆星霜史』 青木文庫 79, 80。

其處へ山路がやって来た。彼は今日の会主で、仙台平の袴に五つ紋、白足袋、雪駄、山高帽という隆としたいたちである。そして言うことには、

「君達のやる事はどうも粗暴でいかん。僕は今麿町署長と会って静粛にやる事を誓って来た。僕は紳士である。誓った事は反古には出来ん。赤旗などは皆捨てて、太鼓なども敵かぬ様にして貴ひ度い。」

無論一同は真っ向から反対した。すると山路は、

「僕は今日の会主だ。会主の命令を聞かねば麹町署に頼んで解散を断行させるぞ」と先づ以て脅かしてから、「値上反対」と大書した紙を竹の先に吊るした。三四百人の群衆は之を見て一斉に拍手喝采を送った。次いで山路は、電車賃値上の不当不義を糾弾する決議文を巨鐘のような大声で読み上げ、そしてその委員として、木下尚江、細野次郎、田川大吉郎、西川光二郎、堺利彦の五名を指名し、決議文を内務大臣に手交する事に決して解散を宣した。

この時、突然堺が立ち上り、

「諸君、これから示威運動をやろう」

と煽動した。山路は吃驚して、堺の左手首をキッと捉へて、

「堺君、君は一体何を云ふのだ。今日の会主は僕なんだぞ……」

と叫んだ。すると堺はぬからずに、

「只今云ったことは会主がイケないそうですから取消します。然し諸君が市内を練り歩くのは自由です」

とやったので、

「堺君、それぢゃ何にもならんぢゃないか——だから一遍懲役に行って来た人間は根性が曲ってゐて大嫌ひだといふのだ」

と山路も聊かならずアタリ気味の言を吐いた。

ている。

愛山は、わが国の国家社会主义提唱の先駆者とみられているが、かれらとともに「国家社会党」を組織した斯波貞吉が、明治25年に『国家的社会論』を著している。緒言に列記してある豊富な参考文献に驚かされるが、斯波は、空想的社会主义は欧州諸国では、すでに廃滅しつつあり、マルクス、エンゲルスが出て初めて社会主义の原理が打ち立てられ、マルクス主義を真正社会主义と認めながら、日本の後進性に着目して国家社会主义を主張した。かれは当時の国際情勢下にあって、富国強兵策を必要を考えていた。日本に国家的社会主义の必要な所以は「凡ソ一國力勢威ヲ張ルニ至ルハ國富ミ兵強キカ故ナリ。然レトモ、強兵ハ富國ノ結果ナリ、——中略——既ニ強兵ハ富ノ結果ナリトセハ、富ハ如何ニシテ之ヲ得ン乎。曰ク、富ハ生産ノ隆盛ヲ極ムルニ由リテ生スルモノナリ。而テ國家ノ發達ヲ計ルモノナルヲ以テ、我國ノ隆盛ヲ計ルニ此主義ニ由ラシテ可ナラレヤ」⁴⁷⁾。条約改正も学芸技術の進歩も帰するところは富国である。富国は国家社会主义によらなければ達成することはできない。国家社会主义の拡張を計らなければならないと主張している。以上のような論述からすれば、「国家社会主义」提唱の先駆者は斯波貞吉にしたほうがよさそうである。

愛山が上記の四つの論文を纏めて、『社会主义管見』として発行（明治39年）したその年に、北一輝が『國体論及び純正社会主义』を出版した。北が本書をかくのにもっとも参考にしたのが、丘

さあ、こうなると今度は同志達が承知しない。突然「山路をやっけろ」という叫びが何處からともなく起って、今、中将湯広告部にいる当時無縫と称した男（無縫といふのは姓であるか号であるか判然しない）が、山路の足を引張って曳きづり下し、筆者なども血気にまかせて、持ち合せの太鼓の撓でしたたかに彼の肩を殴りつけるという騒ぎが持上った。「何を面倒な、畳んで了へ」という掛け声が上った途端、巨岩のような彼の体はおぞくも山下の凹地に突落され、山路は這々の態で「モップ・モップ」と叫びながら、脱げ飛んだ山高帽を地から拾ひ上げて、それでも後を振り返りしながら逃げて行ったのを覚えている。筆者＝吉川守蔵

47) 『明治文化全集』社会篇（続） 131頁。

斯波貞吉は福井の人、明治2年生れ、若くして英國オックスフォードに学び、帰朝後東京大学英文学科選科をえ、新聞記者となり、殆んど萬朝報記者として終始した。『国家的社会論』の目次が記しておく。

第一章 社会主義ノ歴史

第二章 諸種ノ社会主义

第三章 真正社会主义及国家的社会主义

第四章 日本ニ国家的社会主义ノ必要ナル所以

第五章 虚無党ハ社会主义ナリヤ

第六章 社会主義ト土地

第七章 社会主義ト労働

48) 松本清張『北一輝論』 298頁。

49) 『北一輝著作集』第一巻 404頁。

浅次郎の『進化論講話』と竹越与三郎の『二千五百年史』であり、もう一つの種本が山路愛山の史論であるという⁴⁸⁾。北からみれば、愛山は今日の経済的大階級に向って其の生産権と土地生産機関とを国家に奉還せしめんと論ずる講壇社会主义者の代表である。社会民主主義の何んであるかを理解しない経済的尊王攘夷論者である。「喰人族に向って仏教の原理を説きて喰人族に作られる良心を一夜に入れ替ふる能はざる如き今の経済的貴族階級に作成せられたる資本家地主良心に向って生産権奉還を呶々して足れりとする国家社会主义者に放任せば、社会民主主義の実現は地球が慧星と衝突せる後なり」⁴⁹⁾。というのは、愛山の三階級論からくる資本主義体制認識とその批判の甘さを鋭くついたものである。

明治36年に帝国主義を唱え、38年に社会主义を説くにいたる。皮相にみれば、日露戦争を境として、俗ないい方をすれば、右から左へ転向したかの如くみえる。だが、愛山の帝国主義は、人間は存在する権利があるという原点からでている。健康なものが不健康なものを駆逐し、正直なものが不正直なものを排斥し、勤勉なものが怠惰なものを放逐する適者生存の具体化であった。適者生存の理法を国際関係に適応した平和的進出が、どうして不正者によって阻害されなければならないのか。しかし、日露戦争の勝利により、一段と激しくなる国際的闘争の現実に対して、国力の充実を企図して国家社会党が結成され、国家社会主义論が展開されたのである。国力充実の基本は、紳

士閥と平民級との対立抗争が激化しないことである。にもかかわらず、石川旭山が『日本社会主义史』で「日清戦争は将に日本社会主义運動本舞台の序幕を開かんとするの準備なりき」⁵⁰⁾といい、「日清戦争終結を告げて、社会運動の舞台は開かれぬ」⁵¹⁾。述べた如く両者の対立は日々に激化していった。この問題の解決の方途を国家社会主义に求めたのである。

6

わたくしは、最初に、愛山の「英雄論」をとりあげ、愛山の史論は平民政義と英雄主義とによって展開されているといった。そして、英雄主義と平民政義とは何んら矛盾するものでないことを「英雄論」で明らかにした。愛山は多数の人物評伝を書いた。『時代代表日本英雄伝』は『日本人民史』の一節のためのものであった。『為朝論』序の冒頭に「本書題して源為朝と云ふと雖も其實は藤原時代が武家時代に移りたる日本人民史の一時期を解剖したものなり」⁵²⁾といっている。つづいて、宗教、芸術、法律、道徳などが何故に社会制度の現状維持に働くのか、被治者階級の何故に新社会建設に努力するか。過去の史上に現代を支配する法則を発見するのが史学の意義であるという。この問題意識は終始かわらないものであった。「日本の歴史に於ける人権發達の痕迹」(『国民之友』明治30年1日)は『日本人民史』の原初形態である。中世から近世への歴史の担い手の推移を論じている。その最後を以下の文章でしめくくっている。「日本の歴史は幾たび其觀を改めたりと雖も、テニソンが歌ひしが如く、進歩の一線は其間を貫けり。人権は一の時期より他の時期に進む毎に進一步せり。日本の人民は昔より政府をして自己の趣好に適せしむるの能力を有せり。今に至りて此権なしと曰ふ、是れ日本人民の歴史を侮辱する者也。日本の国体を知らざる者也。日本国民の感情に抗して謀叛せんとする者也。二千五百年の間、日本人民の心を大御心となし玉ひし我列聖の

廟謨を輕侮する者也。愛すべき同胞たる者日本の人民たる者、宜しく鼓を鳴して、夫の品川弥二郎氏等及び無識なる歴史家、執迷なる教育家を攻めて可也」⁵³⁾この最後のところは、明治25年、第二回総選挙の時の内相品川弥二郎が、暴力、買収等あらゆる手段を使って大干渉を加え、死傷者までであるさわぎをおこしたにもかかわらず、民党側が勝利をしたという史実を踏まえて書かれている。また、「教育勅語」済発以後の〈内村鑑三不敬事件〉や〈久米邦武の筆禍事件〉などを念頭においていた教育批判、就中、国家主義歴史教育への批判がこめられていることは、『日本人民史』をみれば明かである。同時に、かれが、「日本の皇室は建国の当初に於て概に人権發達史の権化なるを。其徳沢の深く人心に入りて牢乎抜くべからざる者、固より深く怪しむに足らざる也」といっていることを見落してはならないであろう。

さて、未完のライフ・ワーク『日本人民史』は総論、日本人種論上、日本人種論下、史前、日本I、の四部から成立している。ここでは、総論の前半部だけをとりあげたい。愛山の歴史観をみると、それで充分だと考えるからである。愛山はいう。歴史家は時間という大国を旅行して、その旅行記を書くようなものである。この一冊でこの国の歴史を尽くすことはできないけれど、己が心に映じた歴史を書くことはできる。そして愛山は、此書は日本の歴史に就いて自分の思ふ所を無遠慮に語るにすぎないという。無遠慮とは如何なることを云うのだろうか。それは我が國を万国に比類なき特種な位置を占めるものとして、万事を日本中心の立場より歴史を語ることをしないということである。皇国史觀の否定である。わが皇室に対する敬語を他国の帝王と區別したり、また人民の死去に際しては官位により、薨と書き卒と書くというようなことはしないということである。野史には野史氏たるの自由と特権とがある。

さて、文明開化によって急速に変動しつつある我が日本、一層に新しき西洋文明を吸收しなけれ

50) 『明治社会主义史論』 青木文庫 52頁。

51) 同上 54頁。

52) 『山路愛山集』 137頁。

53) 同上 323頁。

54) 『基督教評論・日本人民史』 岩波文庫版 192頁。

ばならない。昨今、古き過去に溯って語ることは無意味である。という考え方を批判して愛山は云う。「如何ナル國ニ於テモ其國史ト其人民ノ性情ヲ合セ考ヘルトキハ必ズ過去ノ現在ニ現ハレザルコトナキヲ見ルベシ。過去ハ亡ビタルモノナリト思フハ誤解ナリ。過去ハ死骸ニアラズ。過去ハ消失セタル怨靈ニ非ズ。過去ハ現在ノ中ニ活動ス」⁵⁵⁾。畢竟、無限の時間を有限の時間に裁断した固定的時代区分こそ無用の妄断である。すべては永遠の今である。また、日清・日露の二大戦に勝利し、さらに大なる世界に雄飛しようとしている時、小さき日本島の古き物語などの説索に拘泥するのは時代錯誤であるというような見解に対して、関ヶ原合戦の両軍の人数は日露戦争時代の一枝軍にすぎないとして、関ヶ原合戦の研究を嘲笑するのは、単に量的大小においてのみ戦争を把握し、質的観点から戦争を考究していないからである。動物学者が小動物（例えは鼠）を解剖して得た一般的法則は大動物（例えは象）にも適用される如く、小さき戦争から得る教訓は大なる戦争に関してもみられる。さらに「国ノ盛衰興亡ヲ支配スル法則ハ、物理ノ試験ノヤウニ小サキ物ノ塊ヲ机上ニ載セテ解剖シ得ベキニ非レバ他國ノ歴史ニ依リテ、自國ノ歴史ヲ回顧シ、古史ニ依リテ現代ヲ比較シ、小サキ盛衰興亡ヲ以テ大ナル盛衰興亡ヲ類推スルノ外ハアルベカラズ」⁵⁶⁾。また、日本歴史も世界歴史の一部にすぎず、世界歴史から孤立して日本歴史は存在しない。世界歴史の波動は日本歴史に波紋を画いている。眼を日本列島にのみ限っていては日本歴史の研究も充分に出来ない。日本以外の世界を学んだことのないものは、実は日本の眞の位置も状態も判然としない。さりながら、これと同時に日本歴史を知らなければ世界歴史も理解出来ないだろう。「欧羅巴ニ行キテ政治学ナド修ムルモノト雖モ其人若シ予メ日本ノ政治ニ就イテ何等ノ経験ナキモノナランニハ其學問ハ自身ノモノニナラズ、畢竟他人ノ噂タルニ終ルベシ」⁵⁷⁾ 宗教改革も、異教徒迫害も、文芸復興も、仏国革命もただ西洋の歴史としてのみ読んで

おれば、それは他人の噂を聞いたにすぎない。日本にも法然、日蓮の宗教改革があり、吉利支丹迫害あり、惺窩・羅山・仁斎・徂徠の文芸復興あり、類似の仏国革命あり、日本の歴史と欧洲の歴史とを比較研究することによって他人の噂ならぬ眞の認識というものが成立するのである。以上歴史的時間、場、認識について述べている。

次いで、孔子の春秋の筆法の影響を受けた水戸流の義理名分論からする、足利尊氏は賊なり、北朝の天子は偽主なりという、官賊両立せずという歴史觀を否定した。そもそも賊とは主権者を易え、自身代って主権者になるものであるが、国始より万世一系の天皇の君臨する我が国では、臣民未だかつて一人だも天子の位を窺ったものはいない。したがって賊というものはいない。国内の争乱は兄弟喧嘩にすぎず、万世一系の至尊に対し忠義を思わざるものなく、日本國の繁昌を念とせざるものなく「タヒ腕力ヲ以テ時ノ政府ニ抵抗シタリトモ直チニ之ヲ称シテ賊ト云フハ誠ニ情ナキ残酷ノ所業ト云フベシ」⁵⁸⁾。ここで愛山は彰義隊に参加し、榎本武揚に従って函館に走って賊名を負せられた父のことについている。そして、彰義隊も、奥羽の有志者も、西郷の味方も忠君愛國の心事は政府人と異ならず、議会というものがあれば言論によって勝負を決しているが、それがなかったからやむなく力に訴えたまでで、君と国とに對する心事は公明正大である。それを支那流の筆法で賊と書くことは事實を辨えず同胞の名誉を毀損するものであると云っている。

ここで愛山は弁証法的發展の論理を展開する。「天下ノ事ハ元来、主論アリ、抗論アリ、結論アリテ始メテ埒ノ明クモナリ。主論ハ物ノ始ナリ。人間ノ進歩ハ必ズ、発起者アリ發論者アリ、先ヅ口ヲ利キ手ヲ出スモノナケレバ世ニ進歩ト云フモノナシ。之ヲ主論ト云フ。——抗論トハ主論ニ對シ批評ヲ試ミ異議ヲ唱ヘ主論ノ性質ヲ十分ニモ十二分ニモ吟味シテ其当否ヲ論ズルモノナリ。——扱テ主論、抗論、互ニ対立シテ双方其主張ヲ往ケズ、相執テ下ラザル其後ニ出デテ述始末ヲ付ケル

55) 同 上 194頁。

56) 同 上 195頁。

57) 同 上 197頁。

モノガ則チ結論者ナリ」⁵⁸⁾。これは議論上だけではなく事業を実現する場合にもなされるし、思慮深き人、決断のよき人というは心中に於て自ら発論し、自ら抗論し、而して自ら結論する人である。およそ、國も人もこの三者の作用が活発に行わなければ健康も進歩もないである。不心得な歴史家によって賊名を負わされた日本史上の人物も、主論者が抗論者か結論者かの役割を勤めて日本国を今日あらしめたものであり、王室に忠義を尽したものである。日本帝国の今日あるは強き個人があつて、強き三論をなしたがゆえである。この見解が抵抗を奨励し、反上抗官の気風を助長する危険な思想であるとする杞憂に対して、愛山は以下の如く反論している。反上抗官を恐しきことに考えるのは支那流の思想で日本流ではない。日本には議会というものがある。この議会は人民党よりいえば反上抗官の一機関であつて政府と戦うためのものである。議会の言論を以って政府と戦うも、兵戈を執つて政府と戦うも反上抗官たることは同じである。反上抗官あればこそ政治は新鮮で國運も進歩したのである。したがつて反上抗官必ずしも忌むべきものではない。或はまた政府は天皇の政府である。その政府に抵抗するは則ち天皇に抵抗するもので不忠であるなどと云うのは甚しい愚論である。政府は天皇の政府に相違ない。しかし人民も天皇の人民である。天皇の億兆を子として養うのが日本の國体である。其政府が天皇の赤子たる人民を悩ますとき、人民が起つて抵抗するのは何故不忠であるか。時の政府が天皇の信任に背いて政府たるの職務を尽さざる時に之を倒して新政府を作ることが何故不忠であるのか。斯様な新陳代謝があったからこそ、日本国は常に進歩してきたのである。したがつて反上抗官の気風は必ずしも悪むべきものではない。時としては大いに奨励してよいものである。しかし何時までも喧嘩ばかりしてはよくない。従うべき時には従わなければならない。抵抗の精神と順法の精神が並び行われるところに妙味がある。順法の精神を以て國の輪郭とし、之に充たすに抵抗の精神を以てする。これが忠君愛國であり、國体の精華であ

ると愛山は云つている。

さて、このような歴史觀をもつて描かんとした日本全史を『日本人民史』と名付けたのは何故か。「我等ハ此書ヲ日本人民史ト名ヅケタリ。書物ノ名ヲ付クルモ人間ノ名ヲ付クル如ク名付親ニハソレゾレ了簡ノアルコトナリ。我等ノ学ブ所ニ依レバ日本ノ國体トシテ第一ニ万國ニ卓越セルモノハ勿論万世一系ノ皇室ナリ。サリナガラ此國体ヲ惡ク解釈シテ唯皇統ノ無窮ニ伝ヘラルルガ有難キコトナリト思フノミニテハ實ハ無意義ナリ。万世一系ノ天皇ヲ戴クト云フニハ二様ノ重大ナル意味アリ」⁵⁹⁾。この二様の重大な意味の第一は、日本国民が皇室を中心とする共同生活体を構成していることである。これは國民道徳上極めて重要である。諸外国の歴史をみると、革命がしばしば行われ主権がしばしば交替している。主権者は國を代表するものであるからこのようない状態では、中人以上はともかく中人以下にあっては國という無形のものへ忠義を尽すことは難しい。宗教的信仰にも何らかの偶像——具体的の礼拝の対象、礼拝の場所等がある如く、國への忠誠も具体的の対象即ち主権者がなければならない。幸いにも日本帝国は歴史以前より皇室君臨し、天地有る限り主権者に変化はない。それ故に國に対する人民の信仰は一定不変であり惑うところなく共同生活を営んで來た所以で、國民が家よりも國を思い眞實に國の生活を享樂する所以である。

第二は、万世一系の天皇は國民の至尊として仰ぎ奉るということである。至尊という意味は天地の外にこれより尊ぶべきものがないということである。ヨーロッパではローマ法皇が隠然として諸国王を支配している。このような国王は至尊とは云えない。わが至尊は唯我独尊で国内のことは絶対の自由をもつて他國の干渉を許さない君主である。このことは國民道徳に重大な關係がある。日本人の正直さ、竹を割ったような真正な性格も、至尊が厳然として在し國民に惑うところがないからである。以上のように万國に比倫なき國体は万世一系の皇室であることである。かく云えば此書は『日本帝国史』と名付けるに相応しいものを

58) 同 上 198, 199頁。

59) 同 上 203頁。

『日本人民史』と名付けるのは何故か。

日本の國体が万国に卓越したものであることは上述の如くであるが、「國体ハ骨ナリ、人民ハ血肉ナリ。猶ホ他ノ詞ニテ分リ易ク言ヘバ國体ハ容器ニシテ人民ハ中実ナリ」⁶⁰⁾。この中実たる人民がしっかりしていなければ、國体も活氣のない死物となる。國の生命は人民の元氣で、國家の進歩発達とは則ち人民が國という生活共同体の仲間となり、その共同生活の利益を受ける者が多くなることである。ところで、明治初年頃には日本の平民はまだ國の共同生活を享樂すべき意識に乏しく、國事を悪い政事を批評するものはたかだか200万の士族にすぎなかった。平民は殆んど國家生活の門外であった。國事については何等の感覺もなかつたが故に日本国民たる心理状態は甚だ漠然としていた。自由民権運動は士族以外の平民にも自分達の双肩に日本國を担い得ることの自覺を促したがために、國事を以ってわが分内とする氣風も起つた。斯様に人民皆國事に興味を有するようになれば國の進歩発達を望むことができる。國の進歩発達は人民が國の共同生活に興味を感じる程度によるのである。國の文明開化は人民の智慧の総量にすぎない。何の世でも英雄の事業と其周囲の人々の性質とは必ず並行する。思想の歴史をみると其世と懸離れた独自の見識といふものはない。社會をリードしていく見識といふものは其思想感情も余り人民と隔りなきものである。國の価値は人民總体の価値であつて、英雄豪傑の価値ではない。されば「我等ノ本篇ニ於テ主トシテ講究セントスル所モ日本ノ英雄、豪傑及ビ其事業ニ非ズ。日本帝国ノ内容ヲ充実ナラシムベキ人民ナリ」⁶¹⁾。以上のような歴史観に立つて、日本全史を展開し

ようとしたのである。

さて、愛山が「日本の歴史に於ける人権發達の痕跡」を書いたのは民友社時代であり、帝国主義論を展開したのは、『独立評論』創刊時であった。そして、國家社會主義を主張したのは、再刊『独立評論』誌上であった。その間に、もっとも自由闊達な信濃毎日新聞時代がある。この時期に、思想的にナショナリズムの傾向を強めたといわれる。わたくしは、さきに、愛山の膨張主義的帝国主義論は幸徳秋水の反戦的帝国主義論を批判したものだといったが、「信濃毎日新聞」(明治35年12月6日)に掲載された「逆旅日記」⁶²⁾は、それをうらざけていると思われる。また、「日本人史の第一頁」(「信濃毎日新聞」(明治34年11月3日))の次の言葉は、膨張主義の立場を明らかに示している。「日本群島は日本人民の骨を埋め了るべき唯一の墳墓に非ず。悠久に無限に日本人民の運命を試むべき大なる戦場に出陣すべき最初の陣営に過ぎざるのみ」⁶³⁾。そして、それは日本人民史の開國史に明証されているという。日本民族の起源、各人種の大陸からの流入、流入したものが流出していく、故郷帰りともいふべきか。しごく単純な論理に思えるが『日本人民史』の総論以下を慎重に検討する必要がある。

愛山の「信濃毎日新聞」時代は、論説を書くほのかは、馬を駆って東奔西走し、県内の青年、婦人のために各地に講演会を開き、啓蒙につくしたといわれるが、東京のインテリ相手ではなく、この素朴な青年、婦人達との接触がその後の愛山の思想形成に重要な役割を果しているのではないだろうか。(つづく)

60) 同 上 207頁。

61) 同 上 211頁。

62) 『山路愛山集』 361頁。

「今日は上京以来の日記を御目に掛けん。

廿五日夜幸徳秋水君、堺枯川君來訪す。幸徳君は諸対面なり。僕大に軍備拡張論を主張す。幸徳君以て然らずと為す。僕謂へらく方向天下の計唯正理の背後に腕力を集め、而して後邁往直進すべきのみ。僕は軍事なき外交、実力なき辞令を嫌うものなりと。幸徳君曰く日本人にして真に文明国民の体面を保たば、天下到る處、我を迎え我を容れん、猶何の武力を恃んで人を畏すを要せんやと。僕猶屈せず、露國の盛んに極東に送兵するの状を述べて兵備拡張の己むべからざるを論ず。幸徳君は兵ありと雖も富なくんば兵も亦継がず。今の計唯国民の勤勉を獎まし、徳操を堅くし以て信を世界に建つる在りと説く。枯川君曰く洋行帰り多く軍備拡張を説く、多く足下の説に似たり。足下は信州に洋行したりと謂つべしと」。

63) 『山路愛山集』 335頁。